

聖書拝読？(2) ἀναγινώσκωの用法

Scripture, to be Read or Worshipped? (2)

Usage of ἀναγινώσκω

楠 本 史 郎

要旨

旧約における「読む」קרא [qara] は、『七十人訳ギリシア語旧約聖書』ではἀναγινώσκω [anaginosko] と訳され、新約各文書もそれに倣っている。この語は、新約でも多くの場合「読む」、「朗読する」を意味している。福音書では旧約の言葉の解釈を巡る論争の引き金の役割を果たす。そこから、言葉の意味を知り、理解することにつながり、イエスを救い主として信じ、従うことへと至る。さらに教会の礼拝における聖書朗読は、教会が同じ信仰に立って一つとなり、困難を乗り越えるためにも重要な意味を持った。

キーワード：聖書拝読 (reading scripture as being worshipped) / 朗読 (reading) / 論争 (dispute)

はじめに

日本のキリスト教会では、礼拝のなかで聖書を読むことを、しばしば、「朗読」という表現を避け、「拝読」と言い表してきた。しかし旧約の場合、「読む」קרא [qara] は、それが律法や預言の言葉であれ、世俗の文書であれ、区別なく用いられている¹⁾。さらにこの語はほとんどの場合、声に出して読むことを意味していた。神の言葉は明瞭に朗読され、公的に宣言され、さらに翻訳や解説によって正しく理解されることを求める。とくに紀元前6世紀のユダ王国滅亡と捕囚以後、イスラエルの民は各地の会堂で朗読される神の言葉を聴くことにより、神の裁きと救いを知り、神を畏れ敬い、礼拝してきた。

本稿は、新約において「読む」、「朗読する」と訳されるἀναγινώσκωの用法を検討する。旧約のקרא は、『七十人訳ギリシア語旧約聖書』LXXでは、この語が当てられている。新約では「読む」とは何を意味するのか、またこの語がどのように用いられているのかを検討する。

1. 新約における「読む」、「読むこと」

新約において「読む」ἀναγινώσκωは、32回、使用されている(表1)。そのうち、新共同訳聖書で「読む」と訳されるのは、福音書で14回、使徒言行録で2回、2コリント書で2回である。どの箇所でも明確に、黙読するという意味では用いられていない。

一方、「声に出して朗読する」という意味では14回用いられており、ルカ福音書で1回、使徒言行録で6回、2コリント書とエフェソ書で各1回、コロサイ書で3回、1テサロニケ書とヨハネ黙示録で各1回、見られる。この場合、旧約の律法や預言書、また使徒の手紙や黙示的啓示などが、公的、私的の区別なく音読されている。

名詞形の「読むこと」ἀνάγνωσιςは3回用いられており、その全てが「声に出して朗読すること」を意味している(表2)。

以下、各箇所において、どのような文脈で「読む(こと)」が使われ、それぞれの箇所がこの語がどのような意味を持っているか、それが朗読と考えられるのかどうか、について検討する。

2. 共観福音書の論争物語における「読む」

表3によれば、共観福音書では、この語はοὐκ

KUSUMOTO, Shiro

北陸学院大学 人間総合学部 社会学科
キリスト教概論

表1 ἀναγνώσκω 32回

読む	声に出して読む
マタイ12：3・マルコ2：25・ルカ6：3	ルカ4：16
マタイ12：5	使徒言行録8：28
マタイ19：4	使徒言行録8：30
マタイ21：16	使徒言行録8：30
マタイ21：42・マルコ12：10	使徒言行録8：32
マタイ22：31・マルコ12：26	使徒言行録13：27
マタイ24：15・マルコ13：14	使徒言行録15：21
ルカ10：26	2コリント3：15
ヨハネ19：20	エフェソ3：4
使徒言行録15：31	コロサイ4：16
使徒言行録23：34	コロサイ4：16
2コリント1：13	コロサイ4：16
2コリント3：2	1テサロニケ5：27
	ヨハネ黙示録1：3

表2 ἀνάγνωσις 3回

読むこと	声に出して読むこと
	使徒言行録13：15
	2コリント3：14
	1テモテ4：13

表3 福音書の論争物語における ἀναγνώσκω

主題	聖書箇所	術語	論敵	根拠聖句
1) 安息日論争	マタイ12：3	οὐκ ἀνέγνωτε	ファリサイ派	サムエル記上 21：1-7 ダビデの故事
	マタイ12：5	οὐκ ἀνέγνωτε		
	マルコ2：25	οὐδέποτε ἀνέγνωτε	ファリサイ派	
	ルカ6：3	οὐδὲ ἀνέγνωτε	ファリサイ派	
2) 結婚論争	マタイ19：4	οὐκ ἀνέγνωτε	ファリサイ派	創世記1：27、2：24
3) 宮清め	マタイ21：16	οὐδέποτε ἀνέγνωτε	祭司長、律法学者	詩編8：23LXX
4) 隅の親石	マタイ21：42	οὐδέποτε ἀνέγνωτε	祭司長、長老	詩編118：22-23
	マルコ12：10	οὐδὲ ἀνέγνωτε	祭司長、律法学者、長老	
5) 死者の復活	マタイ22：31	οὐκ ἀνέγνωτε	サドカイ派	出エジプト記3：6
	マルコ12：26	οὐκ ἀνέγνωτε	サドカイ派	

(ないし οὐδὲ、οὐδέποτε) ἀνέγνωτε「読んだことがないのか」という形で、論争のなかで用いられる。論敵に対してイエスはこの定型句により、旧約の言葉に基づき、反論する。

1) 安息日論争

(1) マルコ2：25 οὐδέποτε ἀνέγνωτε ファリサイ派は、イエスの弟子たちが安息日に麦の穂を摘んだことを非難した(マルコ2：23-24)。旧約律法では、この行為は安息日に行ってはならない労働の一つとされていた(出エジプト記34：2)²⁾。これに対しイエスは、サムエル記上21：1

—7のダビデの故事を取り上げ、「ダビデが、自分も供の者たちも、食べ物がなく空腹だったときに何をしたか、一度も読んだことがないのか」(25節)と問う。これは一見、律法解釈の議論としては論拠が弱い。当該箇所は、サウル王を避けて逃亡中のダビデが祭司アヒメレクから、神に捧げられ聖別されたパンを受け取り、食べたとするが、それが安息日であったとは記していない。むしろマルコの強調点は、イエスが「安息日は、人のために定められた」(27節)と述べ、人間を律法より上位に置いて安息日律法を相対化した上で

「だから、人の子は安息日の主でもある」(28節)と、自身が主であると宣言することにある。

(2) ルカ6:3 οὐδὲ ἀνέγνωτε ルカはマルコ2:27の「安息日は、人のために定められた」という言葉を省略し、直接、イエスが主であることを強調する。安息日の主であるイエスは安息日規定の上に立つ。それゆえこの規定を無効にする権威も持つとする。

(3) マタイ12:3, 5 οὐκ ἀνέγνωτε マタイもマルコに従い、ダビデの故事からファリサイ派に反論する。しかしマタイはマルコのように、安息日規定を人間のためにあるとはしない。あくまでも旧約律法の規定を神の掟として尊重し、律法自体が安息日規定を絶対視していないと強調する。

そのために「安息日に神殿にいる祭司は、安息日の掟を破っても罪にならない、と律法にあるのを読んだことがないのか」(5節)という文章を加える。祭司が安息日に神殿で行う務めは、律法が禁じる労働に当たらない(レビ記24:8、民数記28:9-10)。これに基づき、祭司が神殿に仕えるように、弟子たちが「神殿よりも偉大なもの」つまりメシアであるイエスに仕えることは、安息日律法で認められるとする。さらにマルコ2:27の「安息日は、人のために定められた。人が安息日のためにあるのではない」の代わりにホセア書6:6の「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」という預言を引用し、イエスの立場が合法的であることを強調する。

2) 離縁についての論争 マタイ19:4

離縁に関する律法理解を巡るイエスとファリサイ派との論争である。並行するマルコ10:1-12では、イエスは申命記24:1の離婚規定に言及(3-5節)した後、創世記1:27、2:24に基づき結婚の意義を説き、離婚に対して厳格な判断を示す(6-12節)。そこでは、天地創造の記事が申命記の規定より根元的な根拠とされる。

マタイは順序を逆転する。天地創造物語を「あなたたちは読んだことがないのか」οὐκ ἀνέγνωτε(19:4)と問い、まず結婚の意義と安易な離婚の禁止を述べる(4-6節)。次に申命記の離婚規定を取り上げ、「なぜ(律法制定者である)モーセは、離縁状を渡して離縁するように命じたのですか」(7節)というファリサイ派の質問に対し

て、イエスは「あなたたちの心が頑固」だからモーセは便宜的に離婚を「許した」と述べる(8節)。ファリサイ派の主張するようにモーセは離婚を「命じた」のではない。やむをえない措置として「許した」だけである。「初めからそうだったわけではない」。申命記の離婚規定を本来の規定ではなく、暫定的措置であると消極的に位置づける。

マタイにとって旧約律法はキリスト教会においても重要である。キリストは律法の否定者ではなく、完成者である(5:17)。ゆえに律法規定をイエスの福音のなかに位置づけようとする。

3) 宮清め マタイ21:16

並行箇所マルコ11:15-19、ルカ19:45-48はイザヤ56:7 LXXを用い、本来「祈りの家」と呼ばれるべきエルサレム神殿が、犠牲の動物や奉獻のシェケル銀貨を売り買いする商売の場、「強盗の巣」(エレミヤ7:9-11)へと墮落したことを痛烈に批判する。伝統的な神殿礼拝に対するイエスの否定は、神殿の最高権力者である祭司長や律法学者たちの激しい反発を呼び起こす³⁾。

これに対してマタイは二つの要素を加え、神殿への非難を和らげる。第一は、イエスが神殿で目の見えない人や足の不自由な人たちを癒したという14節の記事である。「目や足の不自由な者は神殿に入ってはならない」(サムエル上5:8)という記述にも拘わらず、これらの人々はすでに神殿礼拝に加わっていた。神殿は本来、弱い立場にある人々を排除してはいない。イエスはここで彼らを癒し、神殿本来の機能を実現している。

第二は、子どもたちが神殿でイエスをほめたたえたという記事(15-17節)である。体の不自由な人たちと並び「小さい者」(25:40、45)とされる彼らが神殿でイエスをメシアと賛美する。これは「幼子や乳飲み子の口に、あなたは賛美を歌わせた」という詩編8:2-3 LXXの預言の実現である。そのことを、神殿の最高責任者である祭司長たちも、旧約律法の専門家である律法学者たちも、理解しない。そこでイエスはこの旧約の「言葉をまだ読んだことがないのか」οὐκ ἀνέγνωτε(16節)と問いかける。

マタイにとってイエスの宮清めは、神殿礼拝や旧約律法の否定を意味しない。むしろそこでこそ、イエスが神殿の主メシアであると宣言される。こ

の宣言が、「あなたたちは読んだことがないのか」という定型句によって引き出される。こうして旧約の言葉はイエスの福音へと接続される。「読む」ことは、聖書の言葉を正しく読み、理解することを含む。旧約の言葉を正しく読み取ってこそ、イエスが真の神殿の主であることが理解される。

4) 隅の親石

(1) マルコ12:10 οὐδὲ ἀνέγνωτε イエスは、イザヤ5:1-7を基にぶどう園と農夫の譬を語り、民の罪の現実と自らの死を予告した。マルコはこの譬話を、先行する3度の受難予告(マルコ8:31、9:31、10:33-34)に続ける。譬話を聞いたのは祭司長、律法学者、長老たち(11:27)、ユダヤ人代表者である。イエスは彼らに拒否され、殺されると告げる。また受難予告では、イエスの死と共に復活にも言及される。同様にこの譬話でも詩編118:22-23が引用され、建築者たちの捨てた石が、建築物のもっとも重要な「隅の親石」となったと語り、自らの復活を暗示する。イエスの復活は、主なる神の業である(11節)。受難と共に復活が旧約預言によって告知される。

この引用に際しマルコは「聖書にこう書いてあるのを読んだことがないのか」οὐδὲ ἀνέγνωτεと記し(10節)、読者の注意を旧約預言へ向ける。この句は、指導者たちが日常的に旧約の言葉を読みながら、真の意味を悟っていないことを示す。さらに旧約の言葉が神により、イエスにおいて実現されることも示している。

(2) マタイ21:42 οὐδέποτε ἀνέγνωτε マタイはマルコの記事を引き継ぎつつ、変更を加えた。マルコでは僕の派遣は3回以上に亘るが、マタイはそれを2回にまとめた。これは、ユダ王国滅亡以前の預言者たちと、以後の預言者たちを意識している⁴⁾。これによりイスラエル史を貫く民の不信仰が指摘され、それは、神の子イエスを無残に殺害する時点で最高潮に達する。この罪の重大性は明白であり、イエスの問いかけに応じ指導者たち自身が神の裁きを予想する(40-41節)に至る。その上でイエスは、「聖書にこう書いてあるのを、まだ読んだことがないのか」(42節)と問いかけ、詩編118:22-23を引用して自らの復活を予告する。その結果立てられる神の救いは「あなたがたから取り上げられ、それにふさわしい実

を結ぶ諸民族に与えられる」(43節)。しかしマタイはルカのように、ユダヤ人がイエスを拒否したために救いが異邦人世界に及んだとは見ない。イエスの十字架と復活の救いに与る「ほかの農夫たち」(41節)とは、民族の違いを越えた「ふさわしい実を結ぶ諸民族」であり、ユダヤ人を排除しない。ユダヤ人であれ異邦人であれ、律法の完成者キリストに従う者には、神の国が与えられるとする。

マルコ、マタイとも、「あなたたちは読んだことがないのか」という定型句は、旧約がイエスをメシアとして指さしており、それを受け入れてこそ真に聖書を読み理解することができることを表している。

5) 死者の復活 マルコ12:26、マタイ22:31

復活を巡る、イエスとサドカイ派との論争記事である。サドカイ派はイエスに論争を仕掛け、極端な例を持ち出して死者の復活の論理的矛盾を引き出そうとする(マルコ12:18-23)。申命記25:5のレヴィラート婚制度を基に、七人の兄弟と結ばれた一人の妻は、復活時にだれの妻となるのかと質問する。死者の復活を想定すると矛盾が生じると指摘した。それに対してイエスは、「あなたがたは聖書も神の力も知らない」(24節)と反論する。この「聖書」は複数形で、旧約の諸書全体を表す。サドカイ派は聖書を知らず、そこに示された神の力に対して無知である。その結果、地上の人間世界の基準を、復活という神の力のもとにある領域に当てはめようとする「思い違い」(24節、27節)に陥っていると断じる。

復活の世界の説明(25節)は、ユダヤ教黙示文学に従っている。復活した者は天に住み、天使のように、地上の結婚とは無関係な存在であるとする。その上で死者の復活を、サドカイ派が重んじたモーセ五書の一つ、出エジプト記3:6の言葉によって明らかにする。神はモーセに「わたしはアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である」と語った(26節)。モーセ以前に地上を去った族長たちを、神は今もなお交わりの内に生かしている。この言葉を「あなたたちは読んだことがないのか」οὐκ ἀνέγνωτε(マルコ12:26、マタイ22:31)と問う。サドカイ派は五書に精通していると自負するが、実はその意味を知らない。そのため

旧約に示された死者の復活を否定し、不誠実な態度に終始しているとイエスは批判する。ただしこの引用では、旧約テキストから直接、復活を証明したことにはならない。むしろイエスの主要な論点は、神が死の力に打ち勝ち、かつて自身の民として選んだ族長たちを今も自分との交わりの内に生かしているということにある。ここでも、聖書を読むことは、ただその文字を読み取るだけでなく、そこに示された神の力を知り、理解して、その内に生きることを意味している。

6) 律法をどう読むか ルカ10：26

ルカ10：25-27の旧約律法に関する問答は、マタイ22：34-40とマルコ12：28-34にも記されている。いずれも律法の中心的規定として、申命記6：5の「あなたの神、主を愛しなさい」とレビ記19：18の「自分自身を愛するように隣人を愛しなさい」を挙げる。マタイの記事はマルコに基づいており、共に、律法学者の「どの掟が第一なのか」という神学的問いにイエスが答える形を取っている。

一方ルカでは、律法の専門家が「何をしたら永遠の命を受け継ぐことができるか」という実践的な問いを投げかける(10：25)。イエスはこれに直接答えず、専門家が身に着けていた聖句箱の文字に注目して⁵⁾、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読むか」 πὼς ἀναγιώσκεις と問い返す(26節)。その結果、専門家自身があの二つの愛の規定を挙げ、隣人についての質問から30節以下の「善いサマリア人」の譬へと進む。この構成はルカ独自であり、特殊資料に基づいている。

ここでの「読む」は、文字を読むだけではなく、「知る」、「理解する」ことを含む。さらに神の戒めである律法に関係する場合には、「行う」、「従う」という行為にまで及ぶ。愛の規定はただ読まれ、知られるだけでは済まない。具体的に隣人に対して実行される。神の言葉が真剣に読まれるとき、その意味が理解され、行為となって現れる。

3. 会堂におけるイエスの聖書朗読 ルカ4：16

並行するマルコ6：1-6、マタイ13：53-58でイエスは故郷ナザレに戻り、安息日に会堂で教えるが、人々から受け入れられない。ルカ4：16

以下では、会堂でイエスがイザヤ書を朗読し(16節)、自らをメシアであると宣言した(21節)ことが加えられている。これはルカの特長資料に基づく。

イエスは当時の安息日の会堂礼拝の仕方に従い⁶⁾、立って聖書を朗読した⁷⁾。その朗読箇所がイザヤ書61：1-2であったのは偶然ではない。ルカ4：14から9：50まで、ガリラヤ地方におけるイエスの伝道が記される。冒頭の4：14で「イエスは“霊”の力に満ちて」とあり、イエスは聖霊の力を受け、故郷の会堂でイザヤ書を朗読する。

この朗読には特徴がある。18節で引用したイザヤ書61：1 LXXは「主がわたしに油を注がれ」(18節)というメシア預言である。神が油を注いでメシアを選び、貧しい者への福音を告げさせる。イエスはこの箇所を朗読した後「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と宣言する(21節)。ルカでは「今日」は特別な意味を持つ。今こそ救いの時である。イエスがメシアとして驚くべき救いの業を行い(5：26)、彼を通して救いが実現し(19：9)、罪ある人間が彼と共に救いへと移される(23：43)。神の民が長年、待ち望んできた救いが彼において実現した。イエスによるメシア預言の朗読は、彼において神の救いが宣言され、すでに始まっていることを告げる。

この宣言に対し、当初、ナザレの人々はイエスをほめたたえる(22節)。しかしイエスの宣言は、人々のメシア待望とは大きく異なっていた。18-19節のイエスの朗読には、イザヤ書61：2 LXXの「わたしたちの神が報復される日」という句がない。ユダ王国の滅亡以降、外国支配に苦しんできたユダヤ人にとって、メシアによる救いの日は外国勢力からの解放を意味した。その時、メシアは異邦権力を滅ぼし、報復すると期待した。しかしイエスがメシアとして宣言する「今日」は、外国勢力に対する報復の日ではない。むしろルカにとってイエスは、異邦人を含む全世界を救う救い主である。そのためにイエスは十字架に付けられ、復活して、人々の罪を赦し、永遠の命を与える。

しかし人々はイエスをナザレで育った一般のユダヤ人、「ヨセフの子」(22節)と見なし、その豊富な旧約知識に驚くに過ぎない。イエスが異邦人

をも救うメシアであるとは信じない。民族の慣例に浸り、そこから抜け出そうとしない。イエスはこれを非難する。メシアのしるしや奇跡だけを求める不信仰を指摘し(23節)、さらにエリヤとエリシャの故事(25-27節)により、神の救いが異邦人に示されたと語る。その結果、人々はイエスを躓き、怒る。自らをメシアと宣言し、神を冒瀆したとして彼を殺そうとする(29節)。このことが後のイエスの運命を決定づける。しかしそのイエスの十字架と復活によって、イエスの福音は罪の赦しと復活の希望を与えるものとなり、ユダヤ人の枠を越え、異邦人を含む全世界の救いとなっていく。こうしたルカの救済史観にとって故郷ナザレの会堂礼拝におけるイエスの聖書朗読は、決定的な意味を持つものであった。

4. 福音書の他の場合の「読む」ἀναγινώσκω

1) 「読む者は悟れ」マルコ13:14、マタイ24:15

終末についてのイエスの預言は小黙示録と呼ばれ、共観福音書に共通して記されている(ルカ21:7-38)。マルコはその中で「読む者は悟れ」ὁ ἀναγινώσκων νοεῖτωと読者に指示し、マタイもこれに従っている。

この「読む」は、たんに知識として読むということに留まらない。初代教会はローマ帝国や地域における無理解と誤解、紛争、さらには迫害の危機にさらされていた。激変する時代状況に対してキリスト者は「蛇のように賢く、鳩のように素直」であることが求められた(マタイ10:16)。そのためには、聖書の言葉の意味を深く理解し、それに基づいて賢く行動することが必要である。それゆえ新改訳聖書はここを「読者はよく読み取るように」と訳している。

読み取る内容について次の事柄が考えられる。

第一は、「憎むべき破壊者」(マルコ13:14)というダニエル書12:11LXXである。そこでは、紀元前168年にシリアのアンティオコス・エピファネスがエルサレム神殿に異教の祭壇を立て、聖なる神殿を汚したことが言及されている(マカバイ書1:54、59、6:7)。この忌まわしい記憶を甦らせ、迫りくる今日の危機に備えるよう勧める。

第二は、その危機が紀元後70年のユダヤ戦争時のエルサレム神殿崩壊を指すのかどうかである。

ルカ21:2はそう理解している。マルコとマタイも、当時すでに過去となったエルサレム滅亡の事実⁹⁾を、紀元前2世紀の事件と重ねて理解し、読み取るよう意図しているとも考えられる。

しかし第三に、教会とキリスト者が直面していた終末的危機を読み取り、それに対処するように勧めているとも考えられる。マルコはユダヤ戦争による緊張と混乱を、終末時における苦難と区別している。「まだ世の終わりではない」(7節)と語り、終末の到来を宣伝して教会を混乱に陥れようとする「偽メシアや偽預言者」(22節)を警戒するよう勧める(5、23節)。終末は近づいている。だが今はまだその時ではない。むしろ終末的緊張感を煽り、人々を惑わす「不法の者」(2テサロニケ2:3、8)や「反キリスト」(1ヨハネ2:18、22、4:3、2ヨハネ1:7)に対して、冷静に対応するよう求めている⁹⁾。

ここでの「読む」は、聖書の言葉を深く理解し、信仰の確信をもって厳しい現実に向き合い、冷静に判断し、行動することを示唆している。

2) イエスの罪状書きを読む ヨハネ19:20

イエスの十字架には罪状書きが掲げられたと、四福音書すべてに記録されている。とくにヨハネ19:20は「ナザレのイエス、ユダヤ人の王」と詳しく記す¹⁰⁾。ナザレ人イエスこそ、神の民ユダヤ人の王であるという信仰を表明する。ヨハネはこの呼称が、総督ピラト自らイエスを尋問し、確定した事実であると強調する(18:33、37)。この罪状書きもピラトが書いて掲げたとする(19節)。

この表記はユダヤ人の罪を告発する。彼らは、自分たちの王として遣わされたナザレのイエスを拒み、十字架に付けた¹¹⁾。その罪は「多くのユダヤ人がその罪状書きを読んだ」ἀνέγνωσαν(30節)ことにより、民全体に告知され、明示される。多くの者が罪状書きを読み上げ、十字架に付けられた無力なイエスを嘲笑った。しかしそれは、自らの罪を公言し、表明する行為であった。それゆえ祭司長たちはピラトに文言の変更を要求する(21節)。ピラトはその必要を認めず(22節)、イエスについての事実と民全体の罪を確定する。ユダヤ人指導者の圧力によって彼はイエスを処刑せざるをえなかったが、なおイエスの証言者の一人として踏みとどまったとヨハネは評価する。

さらにヨハネはこの罪状書きが「ヘブライ語、ラテン語、ギリシア語で書かれていた」(20節)とする。ヘブライ語とは、ユダヤ人民衆が使っていたアラム語だろう。また当時の公用語であるラテン語、また福音書記者ヨハネが親しんでいたギリシア語で記されることにより、罪状書きの内容は、ユダヤ人だけではなくギリシア・ローマ世界、すなわち世界中の全人類に告知された。イエスはたんにユダヤ人の王であるだけではなく、人類全体の王であり、救い主であることを示す¹²⁾。

罪状書きの朗読により、自らの王を十字架に付けた人間全体の罪が明らかにされるとともに、十字架のイエスこそが全人類の罪を贖い、救いをもたらすメシアであると告げられる。

5. エチオピア宦官とフィリポとの対話 使徒言行録8：26-40

ここでは旧約のメシア預言の朗読が重要な役割を果たす。フィリポは主の天使の指示に従い、エルサレムからガザへと向かい、帰国途上の改宗者であるエチオピア¹³⁾の宦官が旧約を読んでいるのに会う(28節)。ここでの「読む」は未完了3人称単数であり、預言が読み続けられていたことを示すが、それは黙読ではなく朗読であった。その声を聞きつけ、フィリポは語りかける¹⁴⁾。この時、宦官が自分で朗読していたのか、部下に読ませていたのかは不明である。

宦官はイザヤ書53：7b-8 cLXXを朗読していた(32-33節)。彼は神を信じ、礼拝のためエルサレムを訪れたが、申命記23：2の規定により主の会衆に加わることができない。神殿の正式の礼拝者と認められない。一方イザヤ書56：3-8は、救いの日には宦官を含むすべての異邦人が礼拝すると語る。彼はこの預言を読み、慰めを得ていた。フィリポは彼の朗読を聞き、「あなたが読んでいることがわかりますか」 γινώσκεις ἃ ἀναγινώσκεις と呼びかける(30節)。この語呂合わせは、朗読が、知り、理解することと結びついていることを示す。朗読によって言葉の意味が人に理解され、伝えられる。聖書朗読の場合とはくにそうである。

イザヤ書53章は初代教会にとって重要な聖書箇所であった。その「苦難の僕」は十字架のイエスを預言していると理解された。ただルカは、イ

ザヤ53：9以下の苦難の僕の贖罪死を引用に含めていない¹⁵⁾。彼にとって「彼の命は地上から取り去られる」(33節)というイザヤ書53：8dの言葉は、イエスの十字架の死ではなく、イエスの昇天と高举を意味する。このように示されたメシア・イエスを宦官は受け入れてフィリポから洗礼を受け、最初のアフリカ人キリスト者となる。

ここでは「読む」ἀναγινώσκωは3回すべて「朗読する」という意味で用いられている。神の言葉は声に出して読み上げられ、その意味が明示され、理解されて、魂を救いへと導く。

6. 新約時代の聖書朗読

1) ピシディア州アンティオキアにて 使徒言行録13：15、27

ルカは使徒言行録で、使徒たちの伝道が各地のユダヤ人会堂から始められたと記す¹⁶⁾。これは、彼の救済史的認識に基づく¹⁷⁾。パウロはアンティオキアの会堂の礼拝で、聖書朗読後、説教を行う¹⁸⁾。それは、会衆の予期した以上の内容だった。パウロはイスラエル史が神の救いの歴史であり、その実現が旧約で約束されているとする。それゆえ神は「約束に従って、このダビデの子孫からイスラエルに救い主イエスを送ってくださった」(23節)。だがユダヤ人指導者たちは「イエスを認めず、また安息日ごとに読まれる ἀναγινωσκομένους 預言者の言葉を理解」しなかった(27節)。この「読む」もまた会堂礼拝での聖書朗読を指す。しかし聖書が読み上げられても彼らはイエスをメシアと認めず、罪に定め、死へと追いやった。ところがその結果「神はイエスを死者の中から復活させ」(30節)、神の救いの言葉は実現した(29節)。すなわちイエス「による罪の赦しが告げ知らされ、また、あなたがたがモーセの律法では義とされえなかったのに、信じる者は皆、この方によって義とされる」(38-39節)と宣言される。

ユダヤ人が聖書を読みながら、その意味を理解しなかったために、イエスは十字架に付けられ、復活させられ、異邦人に救いが告げられる。このパウロの説教は、救いはユダヤ人から異邦人世界へと広がるというルカの救済史観に沿っている。そのなかで聖書朗読が展開の鍵となっている。

2) 古い契約の朗読 2コリント3：14、15

パウロは2コリント3：4-18で、モーセを通じて与えられた律法を「古い契約」(14節)、キリストによって与えられた福音を「新しい契約」(6節)と呼ぶ。前者の栄光に関し、モーセの顔に掛けられた覆い(出エジプト記34：29-35)に言及する。旧約では、モーセがシナイ山で神の律法を受け、顔が神の栄光に輝いたため、民は彼に近づくことを恐れ、その顔に覆いを掛けた。しかしパウロは、モーセの律法はやがて効力を失って消え去り、その顔に輝いた栄光も失われていく。そのことを知らせないために顔を覆ったとする(12-13節)¹⁹⁾。さらにパウロは覆いを、モーセの顔からイスラエルの心に掛けられたものへと移し論を進める²⁰⁾。この消えゆくモーセの顔の栄光の輝きは、古い契約すなわち律法が過ぎ行くことを意味している。

民の心に掛けられた覆いは、彼らが今日まで律法の「朗読」ἀνάγνωσιςを続けながら、意味を理解しなかったことを指す。旧約がメシアの到来を預言したのに、彼らはイエスを拒んだ。また初代の教会がキリストの十字架と復活の福音を宣べ伝えた時も、受け入れなかった。礼拝の度に旧約が「読まれ」ἀναγινώσκονταιしているのに、その心には覆いが掛けられたままである。そのため「今日に至るまで」(14節)、旧約が示すメシアの姿を見出すことができない(15節)。しかし「主の方に向き直れば、覆いは取り去られ」(16節)、真の神の栄光の輝きを受けることができるとする。

ここでも、「読むこと」ἀνάγνωσις、「読む」ἀναγινώσκωは共に、礼拝で旧約を朗読することを指している。その最も重要な意味は、たんなる音読ではなく、キリストに向かい合い、心の覆いを取り去られて、旧約の言葉が示す福音を聴き取り、理解することなのである。

3) 聖書朗読の勧め 1テモテ4：13

ここでは、教会指導者たちの励むべき事柄が3点、挙げられる。初めの「朗読」τη ἀναγνώσειは、旧約や使徒の手紙²¹⁾、黙示文書の朗読²²⁾を指すと考えられる²³⁾。「勧め」は、聖書朗読に続いて初代教会の礼拝で行われた説教(使徒言行録13：15)を、「教え」は教会員および受洗志願者に対するカテキズム(教理)教育を意味する。礼拝における説教、また教理教育の基礎は聖書朗読

であると考えられていた。初代から教会は異なる教えの脅威にさらされてきた。これに対して教会指導者は、こうした学びに励み、正しく教会を牧会し、指導するよう求められている。

7. エルサレム会議の結果を公示する 使徒言行録15：21、31

使徒言行録15章ではこの会議の発端は、ファリサイ派からエルサレム教会に加わった人々が、周辺の、異邦人を含む諸教会に割礼など旧約律法の遵守を求めたことである(1-5節)。割礼を受けず、律法とは無関係に洗礼を受けた異邦人キリスト者たちに不安が走り、教会が混乱した。その解決のため、エルサレム教会に「使徒たちと長老たち」(6節)が集まり、協議を行った。ペトロは異邦人の救いは聖霊によるものであり、彼らに律法遵守を要求すべきではないと主張した(7-11節)。バルナバとパウロが、シリアのアンティオキア教会による異邦人伝道の日覚ましい成果を報告した(12節)後、エルサレム教会の中心的指導者、ヤコブがアモス書9：11-12LXXを引用し、異邦人キリスト者に割礼を求めないという裁定を下す。ただ「使徒教令」²⁴⁾として「偶像に供えて汚れた肉と、みだらな行いと、絞め殺した動物の肉と、血とを避ける」(20節)ことを求めた。

ルカは、この会議で旧約律法の限定的効力が認められたとする。これにより旧約とキリストの福音、また古いイスラエルと新しい教会との接続が確保された。他方、異邦人キリスト者は割礼の拘束から解放され、福音の自由が確保された。こうして異邦人伝道への道が公式に開かれた。そこでヤコブは、この会議決定を公式文書として書きとめ、会堂で律法が「読まれ」ἀναγινωσκόμενοςのように、諸教会で読み上げられ周知されるべきであるとする(20-21節)。教会公文書が作られ、それを公式な使いであるユダとシラスに持たせ、パウロとバルナバを同行させてアンティオキア教会に送った。彼らは、礼拝の中でこの決定を公的宣言として「読み」ἀναγινόντες(31節)上げた。これを教会の人々は喜んで迎えた。会堂で律法が朗読される(21節)ように、エルサレム会議の決定事項が教会の礼拝で朗読された(31節)²⁵⁾。

8. 千人隊長の手紙を総督が読む 使徒言行録 23：34

パウロは、エルサレム神殿を冒瀆し、律法に違反したとユダヤ人に訴えられ、逮捕された(言行録21：27以下)。彼を拘束した千人隊長は、パウロがローマ市民権を持っていると知り、彼を総督フェリクスのいるカイザリアへ送る。その際に千人隊長が書いた手紙を総督が「読んだ」ἀναγνοῦς(23：34)。総督はローマ市民のパウロをローマへ移送する。こうしてパウロはローマで捕らわれつつ、キリストを宣べ伝えることになる(28：30-31)。この物語は伝説的要素が強く、史実性に乏しい。ユダヤ人による迫害とローマ人による保護はルカ特有の図式である²⁶⁾。パウロのローマ行きは、彼自身が望んでいたことであるが(ローマ1：9-13、15：22-29)、使徒言行録ではルカの救済史的枠組みに影響されている。ルカでは、パウロの伝道もまたエルサレム教会が起点となり、そこからローマへと至る(23：11)。総督が千人隊長の手紙を読むことは、パウロがローマ市民としてローマへ赴き、そこで救いを伝えるというルカの枠組みにとって重要な要素となっている。

ここでの「読む」ἀναγινώσκωが朗読を意味しているかどうかは不明であるが、古代文書は間を空けずに単語を続けて書くのが一般的であり、それを読む場合、声を出したと考えるのが自然と思われる。

9. コリント教会との関係での「読む」

1) パウロの手紙を読む 2コリント1：13

パウロが以前の手紙で約束したコリント訪問(1コリント16：5、言行録19：21も参照)を延期したため、コリント教会はパウロの誠実さを疑い、さらには彼の使徒職をも疑った。それに対してパウロは、自分たちは「人間の知恵によってではなく、…神の恵みの下に行動してきた」(2コリント1：12)と弁明し、15節以下でコリント訪問の意志を改めて示す。その際パウロは、自分の書いていることを教会は読み、理解すべきであり、また理解するよう望んでいる(13節)し、実際すでに理解してくれている(14節)と記す。ここでの「読む」ἀναγινώσκωは、3：15と同様、声

に出して読む、朗読することであり、「理解する」ἐπιγινώσκωことと密接に結びつけられている²⁷⁾。朗読する、公的に読み上げる、この目的は、聴衆がその意味を知り、理解することである²⁸⁾。

2) パウロの推薦状 2コリント3：2

ここでもパウロは自分が使徒であり、その「推薦状は、(コリント教会の)あなたがた自身」である(2節)と述べる。教会がパウロの伝道によって始められ、彼が立ち去った後もキリストの教会として立ち続け、礼拝を守っていることが、パウロの使徒職を証明している。それは目に見える文書として存在してはいないが、私たちの心に「書かれている」ἐγγεγραμμένη(完了分詞)。それはパウロのコリント伝道時に書かれ、今も残っている。パウロはこの推薦状が「すべての人々から知られ、読まれて」いるγινωσκομένη καὶ ἀναγινωσκομένη(共に現在分詞)と言う。コリント教会の始まりとともにパウロたちの心の中に書き記されたものが今も知られ、読まれており、パウロの使徒職は現在も明らかに示されているとする。

ここで「読む」ἀναγινώσκωと「知る」γινώσκωが並列されている。文書を読む、とくに神に関わる文書が礼拝のなかで公的に読み上げられるとき、その意味が「墨ではなく生ける神の霊によって」(3節)会衆に知られ、理解される²⁹⁾。

10. 使徒の手紙が教会で公に読まれること

1) エフェソ教会で エフェソ書3：4

エフェソ書をパウロが書いたかどうかについては議論がある³⁰⁾。3：1以下で著者は、神の「秘められた計画」μυστήριονがキリストにおいて異邦人にも示され、パウロがこれを伝えたとする。それについては、「初めに手短かに書いた」(3：3)なので、この手紙が礼拝で読まれた時、「あなたがたは聞いたにちがいない」(2節)と言う。この「秘められた計画」は、神がキリストの十字架によってユダヤ人と異邦人とを和解させ、共に教会に迎えた(2：11-22)ことを意味する。それは本書に記されており、異邦人キリスト者たちもそれを読んで知ることができる(4節)。ここでも「読む」ἀναγινώσκωは、「知る」、「理解する」の意味を持つνοέωに結び付けて用いられている³¹⁾。

読むことは文字を表面的に受け取るのではなく、そこに秘められた神の救いの計画、奥義までを読み取り、理解することにまで至る³²⁾。

なおエフェソ書冒頭の宛名「エフェソにいる」ἐν Ἐφέσῳ (1 : 1) は、有力な写本には見られない。T.K.Abbotは、本来この手紙が、エフェソ教会を中心とするこの地域の諸教会全体に宛てて書かれた可能性があるとしている³³⁾。本書は各教会の礼拝で、その教会名ないし地名を入れて朗読され、その後、他教会へ送られ、同様に朗読された「回状」の一つであったのだろう。

2) コロサイ教会で コロサイ書 4 : 16

ここでは「読む」ἀναγινώσκωがいずれもアオリスト形で、初めの2回は受動形で、最後は能動形で使われている。コロサイ書がパウロによって書かれたかどうかは議論がある³⁴⁾が、コロサイ教会の礼拝のなかで朗読されると想定されているのは明らかである。さらにその後、近隣のラオディキア教会に送られ、その礼拝でも朗読されることが期待されている(16節)。パウロは小アジアの中心都市エフェソに教会を建てた。そこで彼の弟子となった人々がコロサイやラオディキアなど、周辺小都市に福音を伝え、諸教会群を形成した。諸教会はさまざまな異なる思想との戦いを強いられた³⁵⁾。これらへの警戒のため本書が執筆され、この地域の諸教会の間で回され、礼拝のなかで朗読された回状であると考えられる。その際、手紙を全体あるいは、その重要と思われる部分を書き写し、教会に保存することも行われただろう。その結果、コロサイ書やエフェソ書などがまとめられたと考えられる³⁶⁾。

このような、教会にとって重要な使徒的文書は諸教会の礼拝で朗読され、理解され、共有されて教会生活を支えるものとなった。

3) テサロニケ教会で 1テサロニケ書 5 : 27

テサロニケ教会はパウロの伝道により建設されたが、後にキリストの再臨や、世の終わりに起こる死者の復活について疑問が生じ、混乱した。それに答えるため、パウロはこの手紙を書いた(とくに4 : 13-5 : 11)。終末の時が迫るという緊張感から、絶望に陥ったり、現在の生活や仕事を放棄したりする者が現れた(5 : 13)。パウロはそれに対し4 : 11で「落ち着いた生活をし、自分の仕事

に励み、自分の手で働くように努めなさい」と勧め、5 : 14で「怠けている者たちを戒めなさい。気落ちしている者たちを励ましなさい」と勧める³⁷⁾。しかし彼らの中には、パウロを信頼せず、彼の手紙に聞き従わない者たちがいた(2テサロニケ 3 : 14を参照)。そこでパウロは「この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるように」と命じた(1テサロニケ 5 : 27)。「わたしは主によって強く命じます」(新共同訳) ἐν ὁρκίῳ ὑμᾶς τὸν κύριον は「わたしは主に向かい、あなたがたに誓わせる」が原意であり、命令形以上に強い願望を表す直説法である。また本節はこれまでの2人称ではなく、1人称で記される。5 : 2まではパウロが口述し、それを弟子のシルワノかテモテに筆記させたが、25節以下はパウロが直接筆を執って書いたことを窺わせる。さらには文字を読むことができない者たちを含め、全ての教会員がパウロの言葉を主の指示として聴くよう、強く迫っている。

ここで「読む」ἀναγινώσκωが「読んで聞かせる」(新共同訳)、「読み聞かせる」(口語訳)と訳されるのは、この手紙が教会の礼拝の場で公に読まれ、聴かれることを想定しているからである。読むことは、読み手個人が言葉に触れ、理解するだけではなく、教会の礼拝という公的な場で朗読されて聴衆が聴き、理解することに結びつく。

4) 黙示文書を読む ヨハネ黙示録 1 : 3

ヨハネ黙示録は、1世紀末、95年以降のドミティアヌス帝によるキリスト教迫害に際し、小アジア諸教会の指導者ヨハネによって記された。ヨハネは旧約、とくにダニエル書をもとに、苦難の中にある信仰者を励ますために本書を書いた。ダニエル書は紀元前2世紀、シリアのアンティオコスの迫害に苦しむユダヤ人を励ますために書かれた。ヨハネはそれに倣い、自身がパトモス島に捕らえられていた(ヨハネ黙示録 1 : 9)時に幻を通して終末時におけるキリストの勝利を確信した。世の終わりにキリストが再臨し、迫害者を裁き、救いを完成させる。この終末の到来と、その時に起こる出来事は、神がキリストに与え、キリストが天使を通してヨハネに示したものとされる(1節)。それをヨハネは「預言の言葉」(3節)とし、自らを教会の預言者と理解し、諸教会に開示する。それゆえヨハネは、終末に関するこの預言の言葉が諸

教会で「読まれ」ἀναγινώσκω、「聞かれ」ἀκούω、「守られる」τηρέωことを期待する(3節)。

「読む人」ὁ ἀναγινώσκωνは現在能動分詞男性単数である。初代教会にあって礼拝で聖書を朗読する者は、ユダヤ教会堂礼拝と同様、ふさわしいと認められた人が会衆の中から選ばれた。朗読されるのは旧約および使徒書、黙示文書などであった³⁸⁾。他方、それを「聞く人々」οἱ ἀκούοντες、「守る人々」τηροῦντεςは現在能動分詞男性複数形である。語る者は選ばれた一人であり、それを、礼拝に集まった全会衆が聞き、守る。礼拝における聖書朗読は、「聞かれ」、「守られる」³⁹⁾べきものであり、そのように聖書の言葉が人々の中に生きて働く時、「幸いなるかな」μακάριοςという神の祝福が与えられる。

11. 終わりに

以上から、新約における「読む」ἀναγινώσκωの用法について以下にまとめる。

①この語は、共観福音書の論争物語では、否定詞を伴いアオリスト形複数2人称で用いられて、イエスが論敵に反論を開始する定型句を形成している。「あなたたちはまだ一度も読んだことがないのか」と問いかけ、相手の非難攻撃に立ち向かう。

②この定型句によって旧約の言葉が引用される。イエスは独自の理論を展開するのではない。旧約の言葉を新しく解釈し、論敵の主張を打ち砕く。とくにマタイは、イエスが律法の完成者であるとする。彼の言動は律法の規定に適った合法的なものである。その意味で、イエスのもたらした福音は旧約と連続性を保っている。それゆえマタイはこの定型句を、共観福音書の並行箇所には記されない所(安息日論争12:5、離縁問題19:4、宮清め21:16)でも用い、イエスを旧約の真の解釈者として描く。

③この定型句は、イエスと論敵との旧約の言葉の解釈を巡る論争へ導くだけでなく、論敵が旧約を正しく理解していないことを明らかにする。彼らは幼い時から旧約の神の言葉を聞き、読み、守ってきたと自負しているが、実はそうではない。

④神の言葉を「読む」とは、文字に触れ、親しむことではなく、その真の意味を理解することで

ある。「読む」は、しばしば「知る」や「理解する」と並列される。神の言葉に秘められた真理を知り、正しく理解しなければ、それを読んだことにはならない。

⑤新約において「読む」は、ほとんどの場合、黙読ではなく音読を意味する。印刷技術のなかった古代にあって、手書きの手紙や文書、写本は、意味を理解するためにも音読が有効な読み方であり、実際に聖書は朗読された。

⑥会堂の礼拝において、律法や預言の言葉は朗読された。さらに必要に応じて翻訳され、意味が説明された。会衆はそれを聴いて理解することができた。初代教会では、それらに加え、使徒の手紙や黙示文書、また教会会議の決定が礼拝のなかで読み上げられ、その意味を教会のなかで共有することも行われた。さらに地域諸教会に回され、諸教会の信仰の一致を支えた。

⑦旧約の言葉を読み、真に理解することは、イエスをメシアと認め、受け入れることである。イエスこそが旧約において預言されたメシアであり、彼において旧約預言は実現されたからである。それゆえ、たんに聖書の知識を持つのではなく、イエスを信じ、その言葉に従ってこそ、真の意味で旧約の言葉を読んだと言える。

以上から、教会の礼拝で聖書が読まれる時には、「拝読」ではなく「朗読」という表現がふさわしいと言える。聖書の言葉は会衆の前で公的に読み上げられ、告げられ、聴かれる。さらに翻訳や説教によってその意味が明らかにされ、理解される。その結果、全会衆はイエスが救い主であることを知り、理解し、受け入れる。福音を信じ、それに従って生きるよう促される。今日の教会で聖書朗読の意味と重要性がより深く認識され、共有されることが求められる。そのために朗読の技術が磨かれ、礼拝が充実されることが望ましい。

〈註〉

- 1) 楠本史郎 「聖書拝読?(1) קראの用法」『北陸学院大学・北陸学院短期大学部研究紀要第10号』2018年 29ページ以下を参照
- 2) ただしD.R.A.Hareによれば、律法の解釈集であるミシュナーには、少なくとも1世紀の時点では、禁止された39種類の労働の中に「摘むこと」は含まれな

- い。この論敵は、ファリサイ派の中でもとりわけ極端な律法原理主義者が想定されている。Hare, *Matthew, Interpretation a Bible Commentary*, 1993 坂本恵訳 日本基督教団出版局 238ページ
- 3) この事件はイエスの十字架の死へと直結する。それゆえヨハネ2：13-22は、この出来事をイエスの活動の初期に置き、その生涯全体の予告とする。最終的にはイエスの死と復活によって、古いエルサレム神殿ではなく、教会という新しい真の神殿が建てられるとする。
- 4) 橋本滋男、『新共同訳新約聖書注解I』1991年、日本基督教団出版局 131頁
- 5) Alfred Plummer, *International Critical Commentary (ICC), Gospel According to St. Luke*, T.&T.Clark, 1961, p.284-285
- 6) 会堂における安息日礼拝では、ユダヤ人成人男子が聖書を朗読することになっていた。指名された朗読者は、自分の番になると起立し、初めにヘブル語で律法の書トローラーを次々と輪読していく。これはアラム語に翻訳されて会衆に理解される。続いて預言の書ネビーム(旧約歴史書と預言書)が朗読され、やはりアラム語に翻訳される。この場合、預言書は、先に朗読されたトローラーの意味を明らかにする箇所が選ばれ、朗読者が、次に読まれる箇所を指定する。さらに新約時代には、会堂礼拝の初めに告白(申命記6：4-9)が、次に祈りが行われ、これに続いて聖書が朗読された。Karl Heinrich Rengstorf, *Das Neue Testament Deutsch (NTD), Das Evangelium nach Lukas*, 1968 泉治典・渋谷浩訳 NTD新約聖書刊行会 1976年 138頁
- 7) A. Plummer, *ibid.* pp. 118-130
- 8) マルコ福音書の成立をユダヤ戦争以前の60年代とする見解もある(田川建三は50年代と見る。『マルコ福音書上』新教出版社1972年1-6頁)。これに従えば、迫りつつあったローマとユダヤ人勢力との衝突という危機的現実をマルコが深刻に捉え、エルサレム神殿崩壊を察知したとも言える。一方70年代前半、ユダヤ戦争直後の新しい状況に即して執筆されたと考えれば、小黙示録は事後預言であると理解される。
- 9) Vincent Taylor, *the Gospel according to St. Mark*, the Macmillan Press, 1952, pp. 511-522
- 10) 罪状書きの文言は、マルコ15：26とルカ23：38は「ユダヤ人の王」とする。マタイ27：37はこれに加え「ユダヤ人の王イエス」としている。
- 11) Adolf Schlatter, *Erauerungenn zum Neuen Testament*, 蓮見和男訳 1978年 新教出版 321-322頁
- 12) J.H.Bernard, *ICC Gospel according to St. John*, T.&T. Clark, 1976, p.628
- 13) 現代のエチオピア王国ではなく、ヌビア、現在のスーダンに当たると考えられる。この国は紀元前2世紀頃から歴代の女王たちが支配しており、カンダケという称号を持っていた。女王を支える高官として宦官が採用されていたと考えられる。Gustav Stählin, *NTD, Die Apostgeschichte*, 1968, 関根正雄他訳NTD新約聖書刊行会 1977年 250-251頁
- 14) E.F.Bruceは「古代の読書は、ほとんど例外なく大声でなされた」と言う。古代写本の文字は不揃いで、単語を識別するスペースもないので、拾い読みする他はなく、「拾い読みは黙読よりは音読にたよる方がたやすくできる。さらに初心者ばかりはきまって音読した」。黙読が普及したのは印刷した文字が読めるようになってからである。「アウグスチヌスは『告白VI 3』のなかで、ミラノのアンプロシウスが黙読していることを特筆に値する事柄として記している」と述べている。E.F.Bruce, *the Book of the Acts*, 1958, Wm.B.Eerdmans Publishing, 聖書図書刊行会訳 1958年、205頁。
- 15) G. Stählin, 前掲書254-255頁「罪の赦しはルカの場合は明らかにイエスの死ではなくて、その復活と昇天に結び付けられており(5：31)、…イエスの名に対する信仰に結び付けられている(10：43、13：38、26：18)」
- 16) パウロの伝道旅行1：キプロス伝道13：5、ピシディア州アンティオキア伝道13：14、イコニオン伝道14：1、伝道旅行2：フィリピ伝道16：13、テサロニケ伝道17：1-2、ベレア伝道17：10、コリント伝道18：4、エフェソ伝道19：8
- 17) G. Stählin, 前掲書351頁 前項のエチオピア宦官物語も、使徒言行録の画期的な転回点を成す。宦官は、アフリカ在住のユダヤ人以外では初めてキリスト者となったアフリカ人である。ルカは、明確な救済史観を抱いていた。キリストはユダヤ人として生まれ、旧約以来の神の民であるイスラエルに福音を伝えたが、彼らはイエスを拒絶し、殺してしまった。神はこのイエスを復活させ、天に挙げ、その力によって

人類の罪を赦す。それでもユダヤ人は悔い改めなかったために、救いは世界中の異邦人に及んでいく(言行録5:20-32)。この見方からすれば、フィリポの伝道によってエチオピア宦官が救われたことは、救済史の上で重要なエポックとなる。

- 18) 原語の「奨励の言葉」 λόγος παρακλήσεως は会堂礼拝で聖書朗読に続いて行われた説教を意味する。E.F.Bruce, 前掲書291頁
- 19) Ernest Best, *Second Corinthians, Interpretation a Bible Commentary*, 山田耕太郎訳、日本基督教団出版局1987年、64頁
- 20) Alfred Plummer, *ICC Second Epistle of St. Paul to the Corinthians*, T.&T.Clark, 1975, p. 49
- 21) 1テサロニケ5:27、エフェソ3:4、コロサイ4:16を参照
- 22) マルコ13:14、ヨハネ黙示録1:3を参照
- 23) Walter Lock, *ICC the Pastoral Epistles*, T.&T.Clark, 1973, p. 53
- 24) G. Stählin, 前掲書414頁 使徒教令の目的について Stählinは二つの可能性を指摘している。一つは、異邦人諸教会が旧約律法を限定的に認めることによってエルサレム教会の指導的位置を認めることである。それは彼らが同教会を献金によって支えることを含む。もう一つは、ユダヤ人キリスト者が教会において異邦人キリスト者と生活を共にし、一緒に食事ができるよう配慮することである。
- 25) エルサレム会議については多くの疑問が示されている。言行録15章のルカの報告と、ガラテヤ書2章のパウロの報告との間には相違がある。前者は使徒教令に言及し、会議の重要決定事項とする。これにより異邦人キリスト者が旧約律法を限定的に受け入れ、ユダヤ人キリスト者が異邦人キリスト者を認め、双方が一致を見たという。しかしパウロは一切これに触れず、むしろ律法を守ることについて「おもだった人たちから強制され」なかった(ガラテヤ2:6)と記し、15節以下で、律法の行いによるのではなくキリストを信じる信仰によって救われるという立場を鮮明にしている。またパウロはこの会議の結果、ペトロを始めとするエルサレム教会指導者がユダヤ人伝道を担い、パウロたちは異邦人伝道を担うことになったと報告している(ガラテヤ2:7-9)。しかしルカはこうした伝道の分担体制について何も語っていない。

これについて佐竹明は、パウロの報告を重視し、エルサレム会議で使徒教令の取り決めは行われなかったと推測する。会議ではパウロの述べたように異邦人教会の存在が承認され、異邦人キリスト者への割礼の免除と伝道の分担が取り決められた。しかし後にエルサレム教会は、異邦人キリスト者と食事を共にするなどのユダヤ人キリスト者の姿勢がエルサレムのユダヤ教律法主義者から激しく批判され、限定的にせよ律法遵守を使徒教令という形で異邦人キリスト者に求めたとする。『パウロ』、NHKブックス、1981年、136-138頁

真山光彌もまた、ガラテヤ2章のパウロの報告を史実に近いと判断し、エルサレム会議における使徒教令の決定に疑問を呈している。むしろルカは、自らの救済史の枠組みに合わせ、エルサレム会議の使徒教令によってユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者との一致が生まれ、エルサレムから世界伝道が進められていったとまとめたとする。『新共同訳新約聖書注解I』教団出版局、1991年、611-612頁

G.Stählinは、ガラテヤ2:1以下の、シリアのアンティオキアでのパウロとペトロとの衝突は、エルサレム会議の前に生じたとする(Stählin, 前掲書420頁以下)。この地にやって来たペトロが異邦人キリスト者と共に食事をしていたのに、エルサレムから律法主義に立つユダヤ人キリスト者が訪ねてくると、食事に加わらなくなったとパウロは批判している。この事件で律法の位置が問題となり、エルサレム会議が召集された。会議では律法からの自由が認められ、異邦人教会からエルサレム教会への献金活動も受け入れられたが、同時に使徒教令も決定された。ヤコブはこれによってユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者が食事を共にし、一致できるよう願ったのであり、その点でパウロもこれを受け入れたのではないかとする。

ブルースは、パウロがガラテヤ2章を執筆したのはエルサレム会議以前で、その時、私的にエルサレム教会指導者たちと協議したことを記したと推測している。Bruce, 前掲書324頁以下

- 26) 真山光彌、前掲書、648頁
- 27) A. Plummer, *ibid.* p. 27
- 28) 石川康輔 『新共同訳新約聖書注解II』教団出版局、1991年、126頁
- 29) A.Plummerは、通常の「読まれ、知られ」という順

序が、ここで「知られ、読まれ」と逆になっているのは、パウロの言葉を書きとめた筆記者が、後で聞いた単語を先に書いたためだろうと推測している。
ibid. p. 80

- 30) いずれにせよ、教会の中にユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者がおり、両者の平和と一致を願って記されていることは明らかである。
- 31) 「読む」 ἀναγινώσκω は 2 コリント 1 : 13、3 : 2 でも ἐπιγινώσκω や γινώσκω といった異なる語ではあるが、同様に「理解する」、「知る」と結びついて用いられている。
- 32) T.K.Abbot, *ICC the Epistles to the Ephesians and to the Colossians*, T.&T.Clark, 1977, p.81
- 33) T.K.Abbot, ibid. p. 2
- 34) T.K.Abbot, ibid. p.305 コロサイ書はエフェソ書と共通点が多く、何らかの関係が想定されてきた。共に終末論や奥義など、独特の思想を展開しており、他方、パウロが強調した信仰による義が見られないことなどが挙げられる。エフェソ書との関係では、コロサイ書が先に書かれ、それが伝えられる段階で書き加えられてエフェソ書となったとする説や、逆にエフェソ書が先に書かれ、その要約がコロサイ書としてまとめられたとする説もある。Eduard Schweizer, *Evangelisch-Katholischer Kommentar zum Neuen Testament XI Der Brief an die Kolosser*, 1976, 斎藤忠資訳、13頁以下
- 35) エフェソ書と共通して出る論敵については諸説がある。ライトフットはユダヤ教化したグノーシスを想定し、M. デイベリウスは異邦の秘儀宗教、G. ボルンカムはグノーシス的なユダヤ教と異邦宗教の混淆主義、E. シュヴァイツァーはヘレニズム的な宇宙論 (E. Schweizer,, 前掲書234頁以下)、F. フランシスはユダヤ・キリスト教の神秘的禁欲主義を挙げている。宇佐美公史、『新共同訳新約聖書注解Ⅱ』、日本基督教団出版局、1991年、256頁
- 36) E. Schweizer, 前掲書208頁
- 37) James E.Frame, *ICC the Epistles of St. Paul to the Thessalonians*, T.&T.Clark, 1975, p.217
- 38) Charles D. Litt, *ICC the Revelation of St. John*, T.&T. Clark, 1975, p. 7
- 39) ルカ11:28には「神の言葉を聞き、それを守る人は幸いである」というイエスの言葉がある。ここでも神の言葉を「聞き」、「守る」人は「幸い」とされて

いる。ただしルカでは「守る」 φυλάσσω が使われているが、ヨハネは自らにより親しいヨハネ文書の「守る」 τηρέω を用いたと考えられる。C. D. Litt, ibid. p. 8